

生まれ変わり続ける「古典」を楽しむ

—「文楽鑑賞教室」と紐付けた授業実践—

根来 麻子

1, はじめに

2019年1月、明星大学において「古典は本当に必要なのか」と題するシンポジウムが開催され¹、大きな話題となった。これは、古典肯定派と否定派が一同に会し、ディベート形式で意見を戦わせたもので、特に中学・高校という教育現場における必修科目としての「古典」の必要性をめぐる、その後も波及的に様々な議論を巻き起こした²。大学で古典文学教育に携わる者として、もちろん等閑視できない問題であるため、筆者も開催当時から関心を持って議論に注視し、そこから得た知見を自身の授業にいかに関元するか、試行錯誤を繰り返してきた。

大学に入り、自分の興味関心に合う授業を自律的に選択できるようになった学生にとって、古典文学関連の授業を選択するかどうかは自由意志に任されている³。ともすれば、ここで古典との「永遠の断絶」を迎える可能性もある。しかし見方を変えれば、古典と接点を持つ最後の開かれた機会であるともいえる。とするならば、中学・高校時代に古典に親しんできた学生はもちろんのこと、古典を敬遠してきた学生に対しても、もう一度触れてみようと思える場を提供することこそが、古典教育に携わる教員の責務であるといえるだろう。

学生たちに「古典についてどういう印象を持っているか」と問うと、「言葉が難しい」「文法が覚えられない」「内容に共感できない」などというネガティブな答えもある一方、作品に登場するさまざまな「エピソード」「ストーリー」には、比較的親しみをもって接してきたという声も散見される。総合的にみると、「文法や語句の意味を覚えるのは苦手だったが、内容には興味を持てる部分がある」ということになるだろう。それならば、文法事項や事細かな現代語

訳への取り組みはひとまず措き、「エピソード」「ストーリー」に意識を向けることが肝要である。

そこで筆者は、「神話・伝説・物語の受容と再生」という切り口からアプローチを試みることにした。古典に登場する神話・伝説・物語や、特有の世界観のモチーフは、近代以前には芸能や出版文化、近代以降には映画・テレビ・小説などを通じて受け継がれ、再生（リメイク）され続けてきた。そして現代でも、漫画・アニメ・ゲーム等を含む様々なメディアコンテンツによって、再生が繰り返されている⁴。しかし、それらの主たる享受者である学生たちは、そのことに自覚的でない場合が多い。講義内で古典のエピソードを取り上げると、漫画やアニメ・ゲーム作品のタイトルを挙げ、「〇〇の元ネタはこれだったのかと驚いた」という主旨のコメントが少なからず寄せられる。それは裏を返せば、「現代のコンテンツを通じて、無自覚のうちに古典的なものを享受し、興味を持っている」ことの証左でもある。その興味を足掛かりとして、「元ネタ」への関心を広げることができれば、古典への漠然とした忌避感を軽減できるばかりか、今後の能動的な関わりを後押しすることも可能であろう。

筆者は、上記のような思いから、学生と古典文学とをつなぐひとつの方法として、古典文学の受容と再生に主眼を置く授業展開を具体化した。本稿は、甲南女子大学文学部の専門科目「古典文学講読」における授業実践報告である。

2. 授業のねらいと講義スケジュール

まず、本授業のシラバスに記載した「授業のねらい」と講義スケジュールを掲げる。

〔授業のねらい〕

- 1, 兵庫県にゆかりのある物語・伝説を取り上げ、地域と伝説との結びつきについて解説する。
- 2, 現代に伝わる著名な伝説が、どのような媒体によって伝承され、リメイクされてきたかを知る。
- 3, 伝説を伝える媒体としての芸能（能・文楽・歌舞伎・落語・講談等）の役割について考える。

〔講義スケジュール〕（シラバス掲載時。実際には講義順の入れ替えがある）

- 1.兵庫県（播磨・摂津）の歴史と風土
- 2.大国主命の伝承① 有馬温泉の由来
- 3.大国主命の伝承② 国作りと薬の神さま―『古事記』『風土記』―
- 4.神戸の悲恋伝承① 二人の男性に求婚された女性―『万葉集』『大和物語』―
- 5.神戸の悲恋伝承② 二人の男性に求婚された女性―能（謡曲）『求塚』―
- 6.義経と弁慶の伝承① 壇ノ浦から都落ち―『平家物語』『義経記』―
- 7.義経と弁慶の伝承② 平家の幽霊に会う―能（謡曲）『舟弁慶』―
- 8.義経と弁慶の伝承③ 生きていた平知盛
―『義経千本桜』渡海屋・大物浦の段―
- 9.皿屋敷の伝承① 姫路に残るお菊伝承
- 10.皿屋敷の伝承② 江戸を舞台にしたお菊伝承―新歌舞伎『番町皿屋敷』―
- 11.皿屋敷の伝承③ 変容するお菊伝承―落語の中の「皿屋敷」―
- 12.忠臣蔵（赤穂浪士）の物語① 事件の顛末
- 13.忠臣蔵（赤穂浪士）の物語② 舞台化された事件
―『仮名手本忠臣蔵』の世界―
- 14.忠臣蔵（赤穂浪士）の物語③ 語り芸としての発展
―講談・浪曲・映画の世界―
- 15.課外学習：文楽鑑賞講座（於国立文楽劇場）への参加

「古典文学講読」では、2022年度より、「兵庫県にゆかりの伝説」というテーマのもと、著名な伝説の典拠を読み解いた上で、それがどのように変容しながら現在まで伝承されてきたかを通時的に概観する試みを行ってきた。各回の概要を示しておく。

第2・3回目では、日本三大名湯のひとつに数えられる有馬温泉の起源と歴史の伝承を取り上げた。湯泉神社の由緒書等には、「大己貴命と少彦名命が諸国巡行の最中に、傷ついた三羽のカラスが赤い水を浴びて傷を治療しているのをみて、有馬温泉の源泉を発見した」という逸話が伝えられる。記紀風土記等にみえる大己貴命と少彦名命の国作り伝承をふまえ、有馬温泉の起源伝承にこの二神が登場することの意味を考えた。第4・5回目では、芦屋に伝わる「う

なひをとめ伝承」を取り上げ、『万葉集』から『大和物語』「生田川」、そして謡曲『求塚』への変奏を紐解いた。第6～8回目は、尼崎市大物浦を舞台にした義経伝承を取り上げた。『義経記』から謡曲『船弁慶』を経て、浄瑠璃『義経千本桜』（渡海屋・大物浦の段）では、古伝承や謡曲を元にしつつ、どのような創意工夫が凝らされているかを考察した。第9～11回目では、姫路に伝わる怪談「播州皿屋敷」を取り上げ、江戸の「番町皿屋敷」との違いや、新歌舞伎・映画・話芸の中でどのように肉付け・リメイクされていったかについて概説した。

こうした授業実践の中で特に重要視したのは、「授業のねらい」の3として掲げた、「伝説を伝える媒体としての芸能の役割」である。近代以前、こと出版文化の開花以前における芸能は、仏教の教義を伝える説教節（唱導や声明が芸能化されたもの）に代表されるように、メディアとしての役割を多分に兼ね備えていた⁵。つまり、ある伝説が時代を越えて伝承される過程において、書承だけでなく、口承の一形態たる芸能の果たした役割を看過することはできないのである。

2022年度は、各回で取り上げる芸能作品は映像や音源によって紹介したが、作品によっては映像そのものが入手困難な場合もあり、臨場感をもって芸能の面白さを伝えるには、生の劇場空間に足を運ぶことが不可欠であると痛感した。そこで2023年度は、当該科目の課外授業として「文楽鑑賞教室」への参加を組み込み、そこでの上演演目と授業内容の一部とを紐付けることにした（具体的な授業内容については後述）。

3. 文楽鑑賞教室との紐付け

3-1. 文楽鑑賞教室と2023年度の演目

「文楽鑑賞教室」は、国立文楽劇場（独立行政法人日本芸術文化振興会）が主催する公演のひとつで、学生団体を対象とした初心者向けの鑑賞講座である。演目の上演に先立ち、解説「文楽へようこそ」というコーナーが設けられており、そこで各技芸（人形遣い・太夫・三味線）の仕組みや、その日上演される作品の見どころ・聴きどころの解説がなされる。参加できるのは「10人以上の学校団体」という規定はあるが、学生・教員ともに1500円で鑑賞する

ことができる。通常の公演に比べて演目の上演時間も短く、文楽鑑賞の導入には最適の公演である⁶。

2023年度の公演プログラムは以下の通りである。

- ・「五条橋」
- ・解説「文楽へようこそ」
- ・『仮名手本忠臣蔵』より「殿中刃傷の段」「塩谷判官切腹の段」「城明渡しの段」

鑑賞教室の上演演目は、公演前年の12月頃に発表される。2023年度の上演演目は「五条橋」（義経・弁慶主従の出会いの場面）と『仮名手本忠臣蔵』（以下『忠臣蔵』と略称する）であるという情報を元に、講義スケジュールを組み立てた。

鑑賞教室への参加は、2023年6月10日（土）（午後の部、14:30開演）に、本科目の「課外授業」というかたちで実施した。現地集合・現地解散で、受講生32名のうち30名と、大学院生1名、本学科教員2名が参加した。

3-2. 鑑賞教室に向けた授業の工夫

今回の主演目である『忠臣蔵』は、寛延元年（1748年）大坂竹本座で上演され、その後歌舞伎にも移されて今なお人気を博する名作である。周知の通り、元禄十四年（1701年）赤穂藩主の浅野内匠頭長矩が、江戸城松の廊下において、吉良上野介義央に刃傷に及んだ「赤穂事件」を題材にしている。

授業では、鑑賞教室への参加日に合わせ、『忠臣蔵』に関わるテーマで三回にわたる講義を行った。学生世代では、「赤穂事件」あるいは『忠臣蔵』に関する予備知識はほとんどない。実際に三十名強の受講生に聞いたところ、おぼろげにでも内容を知っていたのはわずか数名に留まった。そこで、①史実としてどのような事件が起こったか、②事件を元に創作された『忠臣蔵』の、作品としての相違工夫はどのような点にあるか、③赤穂浪士のエピソードを広く人々に知らしめる役割を果たした「語り芸」の役割、という三つの観点に即して講義を行った。なお、スケジュールとしては、②と③との間に鑑賞教室への参加日がある、という流れである。

一回目は、史実としての「赤穂事件」の顛末を解説した。事件を巡っては、

江戸時代当時の史料においてさえ虚説や創作が入り交じっているため、まずは、史実として何が起こったのかという基本的な枠組を押さえた。二回目は、赤穂事件を題材にした劇作として最も著名な『忠臣蔵』の概略を解説した。

『忠臣蔵』は赤穂事件を元にしてはいるが、江戸時代には武家社会の事件をそのまま上演することが禁じられていたため、時代設定や人名・地名などは、南北朝時代を舞台とした『太平記』の世界に置き換えられている。その設定をまずは確認した。次に、史実にはモデルのいない、劇作オリジナルの登場人物が設定されていることをふまえ、その登場意義について考察する時間を設けた。その上で、今回の鑑賞教室における上演場面である「殿中刃傷の段」「塩冶判官切腹の段」「城明け渡しの段」のあらすじや詞章、芸能としての見どころを中心に解説し、鑑賞時の助けとなるよう工夫した。三回目は鑑賞教室の後となるが、劇作（フィクション）として人気を博した『忠臣蔵』とは別に、あくまで「実録」（ノンフィクション）という体で育まれた、語り芸としての赤穂義士伝の世界を紹介した。

4. 鑑賞教室参加による学修効果

以上のような講義と鑑賞をふまえ、後日、学修支援システム moodle を通じて、鑑賞教室の感想・コメントを収集した。学生からは、「すべての登場人物のセリフを語る太夫は、登場人物やその人物の気持ちによって声色を変える表現にも驚かされました」「(筆者注：人形遣い三人の) まさに阿吽の呼吸を目の当たりにし、だからこそ舞台が始まった瞬間の劇場のあのぴんと張った空気と人形の迫力ある表情や演技を感じたのだと思いました」「判官が切腹をした後は三味線の音はかなり小さくなり、語りもなくなっていた時間がありました。

(中略) 悲しさが伝わってきました」「由良之助が静かに闘志を燃やし覚悟を決め、大迫力の義太夫節「『はった』と睨んで」で舞台を締めくくる様子に胸が熱くなった」「舞台の背景に遠近感があってすごいなと思いました。人間ではなく小さい人形を使うからこそ、あの遠近感のある背景が成り立ち、舞台に奥行きができることでのめり込みやすくなっているんだなと面白く思いました」といったコメントが寄せられた。

印象深かったのは、学生たちが、人形の動きや語り・三味線といった芸その

ものについてはもちろんのこと、舞台意匠の細部や小道具の使い方まで意識を配って鑑賞していたことである。音楽鑑賞が初めてという学生が大半を占める中で、劇場空間で生の芸に触れたことの意義は、確実に認めることができた。事前にストーリーや人物設定などに関する概説を行っていたことで、より舞台鑑賞に没頭することができたようである。

余談ではあるが、私たちの鑑賞日に「判官切腹の段」の語りを務めた竹本織太夫師は、2005年より、Eテレの子供向け番組「にほんごであそぼ」に出演なさっている。受講生の中には、幼少時に「にほんごであそぼ」に親しんでいたという学生が複数おり、「幼い頃毎日のように見ていたので、生で聞けて本当にうれしいです」「小さい頃テレビで見ていた方が目の前にいて、尚且つとても重要な役割をされていると知って、しばらく太夫さんに注目して人形の方を見る事が出来ませんでした」という感想もあった。今回の課外授業が、学生個人の経験の点と点とを繋ぐことに寄与できたことも、副次的な効果のひとつであった。

5, おわりに

和歌の「本歌取り」や歌舞伎の「世界定め」に代表されるように、「受容と再生」は、古典文学・芸能の本質にかかわる重要な一側面である。そしてその仕組みは、現代にまで脈々と受け継がれているといえる。文学・芸能・メディアコンテンツは、相互に影響を与え合いながら、現在進行形で変化と再生を続けている⁷。古典文学作品そのものを読み解くことももちろん重要であるが、受容と再生の歴史を見据えることが、翻って、現代社会における古典文学の位置づけや価値を再認識することに繋がるのではないか。そうすれば、古典文学はもっと身近なものとして受け止められていくに違いない。「神話・伝説・物語の受容と再生」を切り口として古典と現代とを繋ぐ試みは、古典への興味関心を深め広げるひとつの手段として有効であると確信する。

今後は、「音楽鑑賞教室」における演目と授業内容の紐付けを継続すると同時に、他の芸能を鑑賞する機会も視野に入れて、「神話・伝説・物語の受容と再生」の一端をさまざまな題材で紐解く予定である。2024年度は、新たな題材として「土蜘蛛伝承」「ヤマタノヲロチ伝承」などを予定している。古典文

学や文化・歴史に親しみ、能動的に関わるきっかけとなる授業作りを、引き続き模索していきたい。

(文学部日本語日本文化学科 准教授)

¹ 2019年1月14日(月・祝)14:00~17:30、於明星大学日野キャンパス。オンライン併用。筆者はオンラインにて視聴した。

² 本シンポジウムを書籍化したものに『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信、2019年)がある。その後、2020年6月には、古典教育の当事者である高校生によるシンポジウム「こてほんシンポジウム」が開催され、そこでの議論は、『高校に古典は本当に必要なのか 高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ』(文学通信、2021年)として刊行されている。

³ 本学日本語日本文化学科では、1年次の「日本文学・文化入門」において古典分野を必修とするが、その他の古典関連科目は、選択科目として位置づけられている。

⁴ 枚挙に暇がないが、『平家物語』(サイエンス SARU、2022年)『かぐや姫の物語』(スタジオジブリ、2013年)等、古典文学作品をベースにしたアニメ化だけでなく、物語や神話・伝承に登場するエピソードの一部や人物設定の一部を利用した創作作品も少なくない。『呪術回戦』『鬼灯の冷徹』『千と千尋の神隠し』等。

⁵ 『日本大衆文化史』第2部3章「木版印刷と「二次創作」の時代」(日文研大衆文化研究プロジェクト編著、再版、株式会社 KADOKAWA、2021年)、『語り芸パースペクティブ——かたる、はなす、よむ、うなる』(玉川奈々福編著、晶文社、2021年)

⁶ なお、「文楽鑑賞教室」への参加自体は、学生・教員有志により、以前より行って来た。2021年度は、申し込み済みだったがコロナ蔓延のため参加を見送り、2022年度には、学生・教員有志14名にて参加した。

⁷ 昨今、古典芸能側からも、ゲームや漫画・アニメを原作とした作品作りが相次いでいる。たとえば「刀剣乱舞」は、2023年7月に新作歌舞伎『刀剣乱舞 月刀剣縁桐』として上演され、2024年4月にはシネマ歌舞伎として映像公開も予定されている。